

2) 「半日閑話」にみられる口中から芳香を出し続けた男の記述について

A Description of the Man Who Continued Good Smell from a Mouth in “Hannichikan-nwa”

鶴見大学歯学部 ○佐藤恭道, 戸出一郎, 雨宮義弘

Yasumichi Sato, Ichiro Tode and Yoshihiro Amemiya, *Tsurumi University, School of Dental Medicine*

近年, 我国では多種多様な口臭抑制剤が発売され, 口臭に対する社会的関心が高まってきている。口臭の除去については古来様々な方法が採られてきた。「医心方」には「諸病源候論」をはじめ 10 篇におよぶ文献からの引用が認められる。また「今昔物語」や「病草紙」などにも口臭に係わる記述が認められる。特に江戸時代中期には様々な歯磨剤が売られて庶民の嗜みとなっていた。

今回我々は太田南畝の随筆「半日閑話」にみられる, 口中から芳香を出し続けた男の記述について検索したので報告する。

太田南畝(直次郎, 覃: 寛延二年~文政六年, 1749~1824)は, 寛政から文化, 文政年間にかけて幕臣として出仕する傍ら狂歌, 戯作, 随筆などを著し当時の文壇に大きな勢力を持っていた文人である。また山手馬鹿人, 寝惚先生, 四方赤良など多くの雅号, 狂名, 戯作者名を持ち晩年には蜀山人と号し, 75 歳の長寿を全うするまで多くの作品を著した。

「半日閑話」は, 明和五年から文政五年(1768~1823)の市井の雑事を記した太田南畝の見聞記録で, 初め 22 冊「街談録」と称されていたものに, 彼の没後, 南畝のその他の文章と他人の文章を増補して「半日閑話」と題され, 25 巻として流布している。

口中から芳香を出し続けた男の話は「天女降て男に戯るゝ事」として『松平陸奥守忠宗の家来番味孫右衛門と云者, おのれが宅にて, 座席に昼寝して居る処へ, 天女天降りて孫右衛門が口を吸と見て, 其儘辺りを見れども人気もなし, 去迎は思ひも寄らぬ夢を見る物哉と思ひ, 人に語らんもいと恥敷てぞ居けるが, 其後よりして彼孫右衛門が物をいふ度に, 口中異香薫じける程に, 側に居る人々是を不審に思へり。其身も不思議に思ふ処に, 心安き傍輩の申様には, 足下には怠ず深き嗜み哉, いつ迎も口中香しき事, 唯々匂の玉を含む

が如し, 是奇特千万なりといへば, 其時孫右衛門さりし時の有増事を語り, 夫よりして如此といへば, 彼友も奇異の思ひをなしけるとなん。扱孫右衛門美男といふにもあらず, 又は何のしほらしき事もなき男振なるに, いか成思ひ入有てか, 天女はかゝる情をかけつらん, 其源計難し。去れば其香一生身終る迄消ずしかほりけるとなん。是田村隠岐守宗良の家来佐藤助右衛門重友が語る処如此。』と記載されている。

この記述は南畝の多彩な友人関係からの見聞とも考えられるが, むしろ南畝の創作ではないかと考えられる。「半日閑話」には他にも「(太平) 聖恵方」や「広恵濟急方」などの医書, 「半井家」や「医学館考試」に関する記述, また「楊枝」や「歯固め」, 浅草の歯磨剤商人, 松井源水など, 歯科に関する記述も散見できる。これだけ医学歯学に造詣のある南畝であれば簡単に創作できたのではなからうか。狂歌や狂詩の多くはいわゆる本歌取りであり, 南畝も非現実的なことを真面目なふりをして書いたものかも知れない。

特に江戸中期以降の江戸では歯磨きを好んで使っており, 磨き砂や滑石に香料として丁香や龍脳などを加えた歯磨粉が普及し盛んに用いられていた。服装を整えるのと同様に口中にも気をくばっていた。また引札や黄表紙に著明な文筆家の宣伝文を掲載して販売促進をはかったとも言われている。こうした状況の中で南畝が自著にこの話を取り入れたのではないかとすることは想像に難くない。また, この話は近代まで有名であった様で巖谷小波が編集した「大語園」にも天女降臨として紹介されている。江戸から明治, 大正, 昭和と時代が移り変わり社会環境が変化しても, 口中から芳香を発するという事への憧れが普遍的であったことの現れと考えられる。また本記述は, 当時の口臭に対する世相を反映した興味ある資料と考えられた。